



日本ドッジビー協会

概 要 書

2016 年版

① ドッチビーとは

ウレタンをナイロンで包んだ、柔らかいフライングディスクです。

株式会社ヒーロー社 製造の特許品であり、ドッチビー／DODGEBEE は登録商標です。
日本ドッチビー協会（DBJA）は、商標（ロゴ）についての自由な使用を唯一許諾されている団体です。

ドッチビーディスクの持っている特長は

- | | |
|------------------|--|
| (1)自他ともに高い安全性 | 自ら(遊ぶ人)の安全と他(周辺の人・モノ)への安全。の両立 |
| (2)広い汎用性 | 体力・性別・年齢差が出にくい。 |
| (3)ジャパン・オリジナル | 用具も競技も日本発祥。 |
| (4)着実かつスピーディーな普及 | 教育現場への導入。 実質 10 余年あまり経過で経験者は、ほぼ 1 千万人。 |

ドッチビーディスクは、カスタムデザインができます。

企業ロゴやイベント名称などを刷りこんだオリジナルデザインのカスタムディスクが小ロットから、つくれます。

DBJAは、ドッチビーディスクを使った**競技の研究、開発（用具のあり方をメーカーに提言し、ルールを制定）**

そして**正しい基礎（投げる、捕るテクニック）の指導と競技普及（ゲームをおこなう機会促進）**活動を中心に、
活動成果を試す場として**大会の開催**など、一貫したドッチビー普及を目指しています。

また、**関連用品、用具の頒布** や **カスタムドッチビーの受注窓口**としての機能も有しています。

② 協会理念

通常、スポーツ競技団体は強化と称し、アスリート（一部のスター選手）を育成して憧れや目標をつくります。

一方、普及と称して愛好者を増やし、観客やファンをつくります。
要するにトップ選手を頂点に、愛好者を底辺にした、
プレーヤーとその周辺といったピラミッドの構成を目指します。

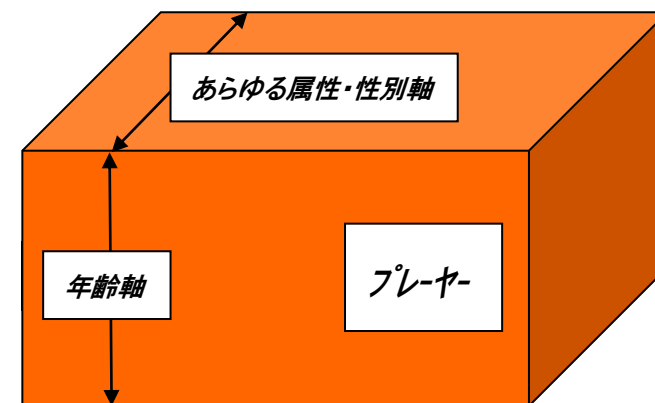
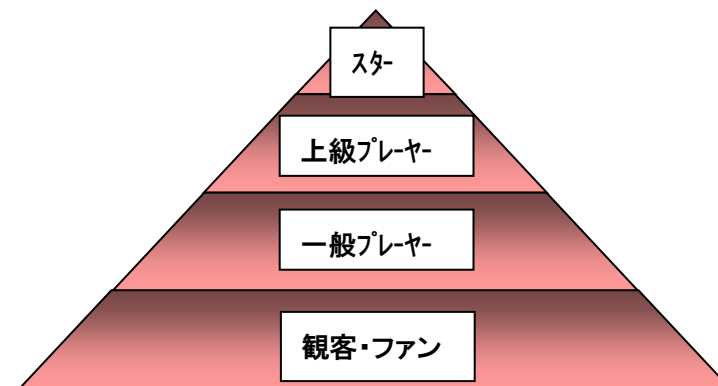
私達はこの既存概念とは一線を画した考え方をもって活動します。

目指すべきあり方は、皆がプレーヤー。

ここでいうプレーヤーとは選手（選ばれし者）でもアスリートでもなく、
何処にでもいる普通の人たちです。

年齢も、性別も、その他属性（例えば障がい者と健常者など）も問わず、
平面的なピラミッドではなく、老若男女といった上下の軸だけではなく、
どちらかといえば、今までスポーツを苦手と思っていた人たちを中心に
限られた地域の中で楽しむだけでもよし。とする、すべてのスポーツの
基礎となり得るような幅をも含めた立方体を目指した取り組みを
基本理念として考えています。

<ドッチビーは‘ドッチ’> あえて、“ヂ”としており、
「ドッチ」と言えば＝ディスク の一般認知を目指しています。



③ 公認推奨競技



**ディスク
ドッチ**

メインターゲットは「小学生低～中学年」とその「ファミリー」
スポーツの得意な子と苦手な子の垣根を取り払います。
家族の共通コミュニケーション・スポーツとして有効です。



**ゴール
ドッチ**

メインターゲットは「小学生高学年～中学生」から「おとな」
ディスクドッチと比較して、スポーツ度を高めた種目です。
スポーツ好きな方の世代間コミュニケーション・アイテム



**ドッチ
ディスク
スタンス**

ターゲットは「全世代」です。
いつでも、どこでも、誰でも、全ての垣根を取り払います。
子どもと高齢者、障害者と健常者など交流を目指します。

④ 活動内容 - ① 講習会の実施・講師派遣の受託

私達、DBJAが最も重要な事業として位置付けているのが講習会です。

・ 第一に、指導者層向け講習会の実施。

各市町村に必ず設定されている「体育指導委員」「子ども会」の役員およびリーダーまた「青少年指導委員」や「児童館ご担当者」など

地域に根ざした活動をおこなっている方々へ向けた講習会を積極的に働きかけます。

(受託を待つのではなく、実施交渉に赴きます)



・ 第二に、昨今、話題となっている「総合型地域スポーツクラブ」など、より多種多層な団体へのアプローチを積極的におこないます。

そのアプローチポリシーとして

・ 重点エリアを設定し集中投下することで、面的広がりを意識した効率化を図ります。(エリア戦略を立て行動します)

・ また、隣接地域による交流大会などをセッティングするようなコーディネート業務も事業範疇と考え、積極推進します。

・ 効果ある講習アイテムを纏めた指導書の作成を進め、それを広く活用することで全国統一的な基礎指導体制を確立します。

※ 協会設立時より、毎年、年間 100~120 件の講習実績となっています。

子どもたちと直接、接する機会を大切にします。

・ 地域を動かす原動力となるのは子どもたちのニーズにほかならず、エンドユーザーである子どもたちの支持を大切にしていけます。



④ 活動内容 - ② 指導者・審判員資格の認定

指導者を養成すること。また、審判員を養成すること。

この二つはそれぞれ別個のスキルや考えが求められることは承知のうえで、ドッチビー普及における資格制度は初期の段階ではあえてヒトツの資格とします。ドッチビー指導者をより細かな地域単位で養成することは重要なことですが、数量的なことに主眼をおくのではなく、その内容として審判ができるレベルのルールを把握して指導をしていただくこと。はさらに重要である。という考えのもと、ドッチビー種目（ディスクドッチ／ゴールドッチ）はこの方式を採用しました。

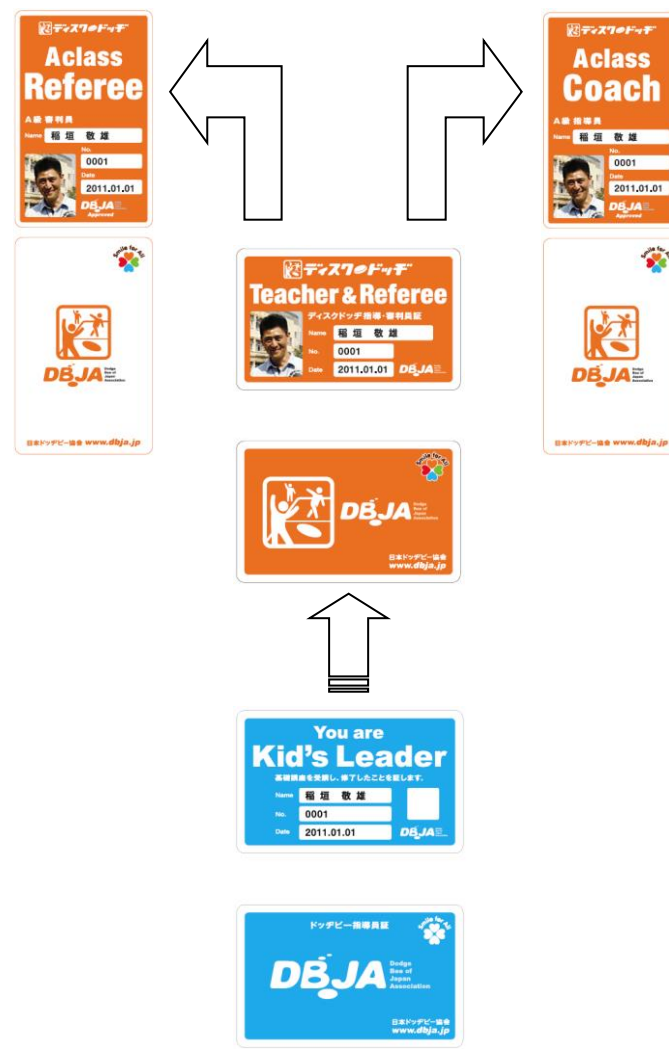
ただし、あくまでも初期段階の資格に限る措置であり、

上級段階は指導者／審判員個々のエキスパート化を図るべく分離独立した全体構成がなされています。

地域大会の主催者層を中心としたニーズがあり、

東京近郊を中心に 2011 年秋から試験的に既に 6 回開催、約 120 名が受講しており資格取得者として活動しています。

2014 年より、競技関係の制度をより明確にして、資格取得制度との整合性をはかった上で早急に本格的な全国展開をおこなう予定です。



④ 活動内容 - ③ 大会の開催



中域大会はDBJAが主催者となって地元関係団体と協働でおこなう大会を各地でおこない、地元にながしかの成果を残して、その後、地元の大会として継続してもらう。これを目指したシリーズ大会の総称です。



広域大会はDBJAが主催して全国をブロック単位（関東や関西など）複数の県を対象とした規模感で、また、公認3種目を同時開催することで種目全体の普及を目指すシリーズ大会の総称です。



ゴールドッジ競技の本格普及を目的に「アクセスの良い場所」での開催を基本方針に既存の民間フットサルコートを利用するなど、規模は小さくても回数は多く、参加しやすい大会です。まずは首都圏を中心にシリーズ化を開始しています。

ドッジビーフェスタは文字通り、フェスティバル的な要素を重視して初心者や親世代へ向けた講習会の同時開催や付帯イベントを充実させて参加しやすい、フライングディスク全体の底上げを目的にしたもので、DBJAがおこなう最も新しい形態の大会というよりもイベントです。



⑤ 今後の活動予定

新規競技種目の研究・開発、そして普及。

高齢者や障がい者と健常者が、一緒におこなう真のバリアフリースポーツを目指し、単純かつ、だれでもできる的当てをルール化して第4の種目として「ディスクゲッタードッチ」と命名しました。2016年度、新たにリリースして本格的に稼働します。



だれもが、より速いスピードでモノを投げることは楽しいものだ！

それをキャッチする、醍醐味と爽快感もまた、楽しい！！

スポーツの基本。と言えるキャッチボール（ディスクの場合はキャッチ&スローといいます）のルール化、そして競技化を考えています。また、ビーチやゲレンデなど魅力的な場所やシーズン制を加味しての研究・開発を新進していきます。